
Mでリリなの。

マゾイズム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mでリリなの。

【Nコード】

N2397M

【作者名】

マゾイズム

【あらすじ】

マゾの子が死にました。その子は自分を受け入れてくれなかった社会に対して強い未練がありました。そのせいで成仏できなかった彼は死神によって転生させられます。全てはマゾの力を示す為に。

マソ死にました。(前書き)

はじまりました。妄想の産物です。気持ち悪いと思います。

マソ死にました。

- - - - この世にまだ未練があるのね。

霞がかかったように意識がはつきりとしないうち、俺はそんな言葉をかけられていた。

見上げてみれば、そこには白くて長い髪をした少女が佇んでいた。

でも、俺が最初に目を惹かれたのはその美しい白髪ではなく、まだ幼さを感じさせる彼女の容貌にはあまりにも不釣り合いな無骨な大鎌だった。

『死神』という言葉が俺の頭に自然と浮かんできた。

- - - - でも、あなたは死んでしまったわ。

死んだ？ ああ… そりゃ死神がみえるんだもんな。

- - - - あなたが望むならば…

そこでようやく俺は意識がはつきりとしてきた。

「あなたが望むならば、生き返ることができるわ。」

「…生き返らせてくれるのか？」

「ええ。」

今一度はつきりと覚醒した頭で少女のことを観察してみる。

年の頃は12歳前後か？

服装を変えて、ランドセルを背負わせたらすごく似合いそうだ。

ちなみに今の彼女は黒を基調とした和服を着ている。…和服なんだけど、微妙にミニで白い素足が眼にまぶしい。眼福です。

顔もかわいい。それもかなりだ。…でも、彼女の無表情さが全てを台無しにしていた。

「なに？」

気が付けば、ジロジロ舐め回すように彼女を見ていたようで、妙に冷たい眼で見られていた。

さすがに失礼だった。いそいで取り繕う。

「あ、いや…珍しかったもんだから、つい…。えっと君は死神ってことでいいのかな？」

「そう。見ればわかる。」

「そ、そうだね。」

表情が読めない…、話づらい…。

「あなたは、現世で死んだ。でも彷徨っている。…どうして？」

「いや…どうしてって言われても。」

「死神は彷徨っている魂を導くのが仕事。でもあなたは導けない。きっと強い未練が現世にある。」

未練…。そりゃ確かにあるけどさ。

「あなたの未練をなくす。それが今回の私の仕事。あなたの未練はなに？」

でも、俺のはあんまり人に言うことじゃ…。

「…なに？」

自分の未練を言おうとしない俺に、催促するように言う死神の女の子。

どうでもいいが、その大鎌いまにも振り下ろされそうで怖いっす。

っていうか、言うしかないのか？この子に？

「未練を消す為に願いを叶えるわ。あなたの願いを言って。」

願いを叶えてくれる…？そりゃ未練を消す為にはそれしかないけど。って…

「マジで！？」

「本気」

「カミングアウトさせて実はドッキリでしたーなんてないよな？」

「…意味が分からない。」

少女は冗談を言っているようには見えない。

ポーカーフェイス過ぎてなに考えているかわかんないだけっていう線が濃厚でもあるけれど。

でも、本気っぽいし言ってみようか？

ええい！！漢おとこになれ！！自分を解き放て！！！！

『罵ってくださいっ!!!!!!!!!!』

「変態」

「ガフツ…そんな汚物を見るような眼で……」

や、やべえ…超いい…ハアハア…。こんな年下の娘に…。

いや、死神なんだから年下じゃないのかもな。いや、いまはいい。

「これで満足？」

小首を傾げながら聞いてくる死神の娘。

「ま、まだだっ…!」

「ゴミクズ。街のダニ。アメーバ以下の下等生物。」

ああ…この娘の淡々とした口調がなんとも堪らない、でもそうじゃないんだ。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。いや待たないでいいんだけど、ちょっと待って…!」

「…なに？」

「生き返らせてくれるんだよね？」

「そう。でもあなたがこれで満足できたなら、あの世に連れて行く

わ。」

「全ッ然満足じゃないっす!!」

「そう。」

「思っただけぞ。俺はマゾこそ最強なんじゃないかと思うんだ。」

「……………」

反応が無い。でもここまできたら、ひかれてもひくことは出来ない!!

「マゾは苦痛も快感に感じるんだっ！それはすなわち身体が壊れない限り努力が出来るということ!!肉体的にも、精神的にもだっ！俺は生まれて18年マゾだというだけで敬遠されてきたッ！社会不適合者としてずっと辛酸を舐めてきたんだ！だが俺は自分を解き放つことにした。俺が間違っていたんじゃない、社会の方が間違っていたんだ!!俺は、マゾこそ最強！マゾこそ正義！ということは今まで俺を虐げてきた社会に証明してみせる!!」

どうだ、言い切ってやったぜッ！

「そう。でもそれはできないわ。」

「…え？」

「あなたが生き返れるのは、今まで生きた世界とは別の世界。あなたの見返したい人間達はいないわ。」

なん…だと…？

「でも、別の世界なら生き返れるんだよな…？」

「そう。」

「なら俺はその世界でマゾの力を証明するっ！！」

「…そう。なにか願いはある？」

「ん？願いはマゾ最強説の証明だけど？」

「違う。私も暇じゃないわ。あなたにはやく目的を達成してもらうために、ある程度能力を付与させてもらうわ。」

「あー…そういうこと？でも、おれ自身の力じゃないと意味無いからなあ。」

「……………」

な、なんかいま一瞬ムツとした顔をした気が…。

「そう、なら私が勝手に設定するわ。あなたの言葉に全世界の人が絶対服従。転生先は人類があなたのほかに1人の世界。」

「ちよつま！それだと直ぐに目的達成しちゃうだろう！！というかそんなんじゃない！満足できない！」

「なら、あなたが決めて。」

むっ…悩むな…。どうしよう。

「それじゃ、ものすごく回復が早い身体って出来る？無敵の身体じゃないくて、あくまで回復が早い身体ね。ココ重要。」

回復が早ければどんなハードな事でもやり放題だからな、フヒヒッ。

「できるわ。でもそれだけじゃダメだわ。」

む…。まだダメと申すか。

「それじゃ、師匠をつけてくれないかな？文武両道で、すごくスパルタな人。もちろん女の人ね！あと、できれば若い方がいいな。」

「注文が多いのね。でも私は死神。人を生み出すことは出来ないわ。」

「そっか、出来ないのか。…残念だな、スパルタ女教師…。」

「できるわ。」

「え？いや、言っていることが矛盾してない？」

「文武に秀でていて、若い女性なら。」

「むっ…スパルタじゃないのか…。まあ贅沢はいえないな。」

「そう。他には？」

「え…まだ？うん。君はどんなのがいいと思う？」

俺が話を振ると、少し考え込むしぐさをする死神の少女。かわいい。

「そうね。あなたが重視しているのは力を得るまでの過程。才能の上限をなくすわ。」

「え…？いや、それは…。」

「なに？」

すごく睨まりました。怖かったです。ハアハア

「あなたに満足してもらわなければ、私もこの仕事を終わられない。だから出来る限り意志に沿うようにするわ。」

そっか…この娘も俺が彷徨っているせいで余計な仕事が出来たんだよな。

出来る限り譲歩できるところは譲歩しよう。

「わかった、お願いするよ。」

「そう。転生先に希望はある？」

「いや、特には。」

「そう。あなたの記憶の中でよさそうな世界があったわ。そこでいい？」

「よさそうな世界？」

というか俺のプライバシーとかは？

「リリカルなのはっていうアニメの世界。」

「いや、なんでそこ？っていうかなんでアニメの世界？」

「私は新しく世界を作り出すことは出来ない。だから既存の世界を使うしかないわ。不満？」

言葉は俺の意志を汲もうとしてるみたいだけど、拒否するなっていうすごいプレッシャーを感じる。
この子すごい良い。

「文句ないであります！！そこでいいです、いや是非そこにいかせてください！！」

「そう。それじゃ飛ばすわ。」

「あ！ちよつと待って。」

「なに？」

「俺、佐藤健一っていうんだ。自己紹介まだだったからさ。君は？」

「小夜。」

「そっか、似合ってるな。」

「…飛ばすわ。」

そこで俺の意識はまた途切れた。

マゾ死にました。
(後書き)

作者はマゾです。

仏のクロノ。(前書き)

妄想の産物です。気持ち悪いと思います。

仏のクロノ。

「おい、大丈夫か!!」

またもやぼんやりとした意識の中で呼びかける声が聞こえた。
今度は男の子の声のようだ。

「うつ…くらツとする…。」

朦朧としながらも、身体を起こして自分の今の状況を確認する。

黒い髪をした男の子が膝をついてこちらをのぞきこんでいるのが最初に目に入った。

どこか見覚えのある顔だけど、こんなに幼い男の子なんて、リリなのに出てきたっけ？

「目を覚ましたか。どこか痛むところはないか？」

男の子が話しかけてきた。随分大人びた話し方するんだなあ、とぼんやり思ってみたり。

「クロスケ心配しすぎだつて。」

「ロツテが楽観的すぎるだけでしょ。」

「見た目ボロボロなだけじゃん。心配ないよ。」

そして、上の方から女の人の声が聞こえてきた。
段々意識が覚醒してきたけど、なぜか俺が倒れていた場所は落とし

穴の底みたいなところだった。

「ん…なんで俺こんなところで寝てるんだ？」

言いつつ、俺はさっき女の人の声がした方。上を見上げた。

そして俺は初めて魔法を目の当たりにした。

「これが魔法だと！！！！？」

思わず叫んじゃったさ。

だって、2人の女の子が空に浮いていたんだもの。ミニスカートで
！！！！

でも見えなければいけないものが見えない。

これが魔法…なんてこった。こんな男子の夢を奪うような魔法やだ。
俺は絶対認めないぞ！絶対にだ！！！！

「もう魔法なんてやだ。」

ついつい本心が口からポロリ。ついでに盛大にため息をついておく。

「ちょ、君はいきなりなにやさぐれているんだ！？意味がわからないぞー！」

男の子がヒス気味に叫んでいる。

そういえばさつきクロスケとか言われてたな。それにあのミニスカートの女の子達にも見覚えがある。確かリーゼ姉妹だよな？

ってことは、この小さい子がクロノ・ハラウンか。原作でも若かったけど、更に幼いな。

…あれ？でもそんなクロノと視線の位置が変わらないのは何ででしょう？

俺はようやく自分の身に起こった変化を自覚した。

目が覚めたら身体が縮んでいた……

やあ、俺は佐藤健一。18歳。身体は子供、性欲は人一倍（そしてマニアック）。

ははっ、さらに社会不適合者だぜ。
でも俺は負けない。だってマゾだから!!!

「ここはどこ。どうしてこんな穴の中にいるの？私は佐藤健一。君はだあれ？あの子たちは誰？どうして中が見えないの？サービス精神って知ってる？」

「落ち着きが無い奴だな。ていうか最後の質問はなんだ？まず、僕はクロノ・ハラウン。あそこで浮いているのが左からリーゼアリア、リーゼロッテだ。ここは管理局の訓練施設で、穴の中にいるのは、君が落ちてきたときに空いたクレーターの中にいるからだ。」

おお…こんな子供が完璧に質問に答えてる。
っていつか落ちてきた？小夜さん『飛ばす』って本当に飛ばしたんですか？

やばい、あの子やっぱ才能あるわ。

「なにをニヤニヤしているんだ…？こつちも聞きたいことがあるんだ。」

おっと、思わず顔がにやけていたか。
出来るだけ平静を装って…っと。

「聞きたいこと？」

「君はどこから来たんだ？さっきの魔法に対する反応から言って、管理外世界の人間みたいだが？」

ちよっと迂闊すぎたな…。全部説明すると非常にめんどくさくなりそう。

ここは定番でごまかすしかないっ！

「えっと…。俺落ちてきたせいで、自分の名前以外思い出せないみたいなんだ。」

「思い出せない…？やっぱり頭を強く打っていたみたいだな。とりあえず病院で検査してもらおう。」

やばい。クロノ親切すぎる…。

……………

……

…

あっさり俺の話を信じてくれたクロノに連れられて、管理局内の病院へ連れていってもらいました。

もちろん検査結果に異常は無かったけれど、記憶が無いの一点張りで押し通せました。記憶喪失…ごまかしの定番だけあって、素晴らしい。

いろんな機械に通されて検査されながら、俺はこれからのことを考えていた。

恐らく、師匠っていうのはリーゼ姉妹のことだろうな。まあ、確かにあの2人に師事すれば文武両道だな。

それに、このまま管理局に入って、駆け上っていけばマゾ最強説を証明するには一番手っ取り早そうだ。

なるほど、小夜もちやんと考えている。

ただ…なんで身体が縮んでいるんだ？

つま、考えても無駄か。

そして、ようやくと言えるぐらい長い検査を終えて、検査室から出ると見覚えのある白髪の女の子が目の前にいた。

「何してるの、小夜？」

「師匠。」

「え？」

なぜか、薄っぺらい胸を張って言う小夜に思わず聞き返してしまう。
うん、見事にぺったんこ。

「だから、あなたの師匠。」

……。うん、なんだろう。俺には小夜が自分を師匠だと言っているように見えるんだが。

「えっと、小夜が俺の師匠？」

「そう。」

やっぱりそうみたいでした。

「えっと。リーゼ姉妹は？」

「……？なんのこと？」

まるつきり分かってない顔をしていらっしやいます。いや、相変わらぬのポーカ―フェイスなんだけだな！

というか、もしかしてこの娘何も考えてないんじゃないだろうか？

「ここに飛ばしたのは、俺を手っ取り早く管理局に入局させる為だよな？」

「……。そう。」

なんだ今のはっ！！！！

「えっと、俺を小さくしたのには何かわけが？」

「師匠より大きいのは生意気。」

「……………」

なんと言つことでしょう。

この娘は自分が気に食わないという理由で人を退行させたのですっ！！！！

何たる理不尽っ！！！！

でもそこがいい！！いいぞ、もっとやれ！！！！ハアハア

「健一検査終わったのか？ん…その子はだれだ？」

検査が終わったのを見計らってクロノが来た。なんとできた子供なんだろう。

ただ、小夜のことはツツコミなしの方向でお願いしたかった。

「やっぱり、記憶喪失みたいだよ。えっとこの子は…。」

「師匠。」

「は？」

なんと説明しようか迷っているうちにめんどくさくなりそうなことを口走ってくれました。

「妹だっ！！！」

とりあえず、勢いで叫んでみた。

「俺が急にいなくなつたから、探しにきてくれたんだ。なんて兄想いな妹だろうなっ！！」

急に必死に叫びだした俺を見る2人の視線が痛い。でも気持ちいい。

「ししょ「妹だよな！な！小夜？」…そう。」

小夜も折れた。俺にかかればこんなもんだぜ。
でもこんなかわいい子が俺の妹。ムフフ。

「一応管理局内は関係者以外立ち入り禁止なんだが…。というかどこから入ってきたんだ？」

…新たな問題が発生。

思いつきり怪しまれている。
こついうとき聡い子は面倒だ。

「実は小夜も俺を迎えに来る途中に頭を打って記憶喪失みたいなんだ…。」

我ながら、なんという苦しい言い訳！
怪しい。怪しすぎる。

クロノも思いつき苦笑いしている。

「私は記憶喪失じゃない。」

.....。

小夜さん、なにを言っていますか？

そんなに俺を苦しめて楽しいですか？ええ、もっとやってください。

「つと、彼女は言っているんだが？」

「いや、小夜はちよつと混乱してるんだよ。」

「.....。」

クロノはジーツと俺達2人を値踏みするかのように観察している。
嫌な予感しかないっす。

「...まあ君達にも色々事情がありそうだ。深くは聞かないでおこう。
その様子じゃ帰る場所もないんだろ？母さんに話をつけたから、
少しの間なら君達を保護できると思うが？」

そのときのクロノは俺には仏に見えた。そしてリンディさんありがとう！

なんという寛大さ。こいついいやつ！誰がなんと言おうといいやつ！
誰だエロノとかいったやつ！！

エロイのは正常なんだよ！！！！

こうして、俺達2人はハラウン親子に厄介になることになった。

仏のクロノ。(後書き)

あのミニスカートの中身が見えないのはおかしいんだっ！

魔法を使っているとは思えないっ！！

ちなみに作者は、パンもろよりパンちら派です。激しくどうでもいいですね、すいません。

ハラオウン家にて。
(前書き)

妄想の産物です。

ハラオウン家にて。

ってことでやってまいりました、ハラオウン家。

「お邪魔しまーす。」

『……………』

何だろう、家の中から全く反応が無い。

これはまさか……………放置プレイ？

俺の性癖を知ってのリンディさんなりの歓迎！？

できる……。これが人妻……。

「今は母さんは仕事だから家には誰もいないんだ。」

まあ普通に考えたら、俺の性癖なんか知ってるわけないですよー。

「いつ帰ってくるんだ？」

「ああ、母さんなら暫く帰ってこないよ。母さんも管理局の人間で今は船に乗ってるからね。ってこの説明でわかるかい？」

……………なんだろう。なんでもない風にクロノは言うけど、こっちとしては地雷を踏み抜いた感が。

「ああ、大丈夫だよ。ってことは、今は1人でこの家に住んでいるのか？」

変に話題を変えるのは不自然だし、このまま話しておこう。
ただ、父親の話には触れない方向で。

「そうなるね。ああ、変に気を使わないでくれ。あらかじめ言っておくが、父さんが死んでいないことも、母さんが仕事で家にいないことももう慣れているからね。変に同情される方が迷惑だ。」

ちよっ…精神的に大人すぎるだろこの子。

いや、まあ気にしなくて良いって言ってくれるのはすごく楽だけど。

「それに、ロッテやアリアもちよくちよく顔を出してくれるからね。あの2人が来ると寂しがつている暇も無いよ。」

ちよつと遠い目をしながら言うクロノ。俺はちよつとうらやましいんだけど、その状況。

まあ、これだけクロノが大人びているのも、親がいないから自分がしっかりするしかないという環境のせいなんだろうな。

「いつまでここで話しているの。」

ボソリとおっしゃる小夜さん。

うん、この子は同情とか絶対しないから安心しろクロノ。

「いつまでも玄関で話しているのもおかしいものだな。さあ遠慮せずにあがってくれ。」

そして気にもしていないクロノ。やっぱりいいやつ。

家が上がってみれば、2人暮らしには広すぎるぐらいのいい部屋だった。

って、元々は3人で暮らしていたのか…？
そこらへんはまあいいか。

「君も適当に座ってくれ。たいしたものも出せないが、ジュースでいいかい？」

小夜はいつの間にかそこまで行ったのか、既にソファの上にちゃんと正座している。

遠慮とかホントにないっすね。

それにしても、ジュースか。クロノも大人びていても味覚はお子様だな。

…今は俺も子供でしたね。むしろ俺達に合わせているんじゃないかな？
うか。

「お構いなく。クロノこそ俺達にあんまり気を使わないでくれ。」

「牛乳がいいわ。」

…小夜さんホントフリーダムっすね。

「すまない、牛乳はないんだ。」

「そう。…だから身長が伸びないのね。」

こらっ！身体的特徴を責めるのはノーマルの人には苦痛だぞ！！

俺ですか？どんどんやってください。

「…ははは、君達兄妹は随分性格が違うんだな。」

クロノの笑顔がちょっと引きつっている。

「よ、よく言われるんだ…。」

多分俺も引きつった笑みで答えていたとおもっ。

余談だが、その後ハラウン家には牛乳が常備されたという。

その後俺達は、色々話をした。

まあ、一応俺は記憶喪失ということにしてあるので、ほぼ一方的に話を聞くことになったのだが。

クロノは絶対俺達が記憶喪失とは思っていないだろうが、それを分かっていてツツコミを入れてこないクロノはやっぱりいいやつ！！話をしていたのは、俺とクロノだけ。小夜さんはもらったジュースをちびちびと飲んでいらっしやいました。

さて、結構長い時間を話したおかげで知らなかったことも分かった。やっぱりアニメを見たただだと、全然分らないこともあったし、クロノから聞いたことはかなり有益だったと思う。

というか、クロノはまだ7歳だそう。

身長もほぼ一緒だったし、とっさに俺も7歳ってことにしておいた。…今思えば、小夜のほうが今の俺より大きいのに、妹っていうのは少し…いや、かなり無理があったな。まあ、どうせ嘘だっただけでいいよな。

ピンポン♪

話に一段落がついたと思った頃に、来訪者を告げるチャイムがなった。

時計をみれば随分といい時間になっている。具体的にはお腹がペコペコです、はい。

「ロツテとアリアかな。後で来ると言ってたからな。ちょっと出てくるよ。」

来訪者はクロノの予想通り、リーゼ姉妹だった。

ミニスカートの魔法については断固抗議すべきだが、基本的にこの2人は好きだ。

ああ…ロツテさんにいたずらっぽく責められたい…。アリアさんに知的に責められたい…。

「…なにか良いことでもあったのか？随分幸せそうな顔をしていたが。」

おっと、いかんいかん。いつの間にか自分の世界へトリップしていたようだ。

出来るだけ平静を装って、ニツコリと笑みを浮かべクロノ、ついでにリーゼ姉妹に返事する。

「なんでもないさ。それよりも二人揃ってどうしたんですか？」

「私達はたまにクロノのご飯を作りにきているんだよ。」

「ほら、このとおり！」

まずアリアが答えて、それに応えるように、食材が入っているのだろうか？ビニールの袋を掲げて見せるロッテ。

「クロスケは料理ダメダメだからねー。そんなんだから大きくならないんだぞ？」

「ロッテだって、料理はアリア任せだろう。人のこと言えないじゃないか。それに僕はこれから大きくなるんだ。」

「はい、ムキにならない！私にはアリアがいるから料理はうまくならなくていいんだよーだ。」

「料理できないのはいいけど、つまみ食いは止めてくれると私も助かるんだけどね。ねえ、ロッテ？」

「どうやら、料理はアリア一人で作るようだ。」

「ここは少し働いておこう。ついでに心象アップだ。」

「それなら俺が手伝いますよ。それでもそれなりには料理は出来ますから。」

「えっと、君は確か健一君だったよね。その歳で料理が出来るとは感心だね。それじゃ少し手伝ってもらおうか？」

十中八九、今日来たのは俺達の様子を見るためでもあるんだろうな。わざわざ思い出そうとする仕草なんてしなくてもいいのに。

でも褒められた。本当は18歳なんだけどちょっと嬉しい。

マゾは褒められても嬉しくないだろうって？マゾだって褒められれば普通に嬉しいですよ？

と、そこで俺のことをジーツと凝視している視線があるのに気が付いた。

「どうしたんだい、小夜？俺になにか用かい？」

良い兄をイメージして優しく声をかけてみました。

「変態ね。」

バツサリでした。

どうやら、俺がリーゼ姉妹に責められるのを想像してトリップしていたのは小夜さんにはお見通しだったようです。

今度はすごく嬉しかったです。

さて、調理を終えて今は食事中。

「驚いたね。こんなに料理がうまいとは思っていなかったよ。」

「ええ、まあそれなりですよ。」

アリアは俺の料理の腕前に驚いていた。

生前俺は高校生ながら1人暮らしをしていた。

そして、基本的に外食しないせいで料理がうまくなっていた。

なんで外食しないかって？誘ってくれる友達がいなかったんですよ？
？なにか問題でも？

さて、そろそろ俺の目的に向かって行動を開始しようか。

「あの、折り入ってお願いがあるんですが。」

和やかな食事の途中に、いきなり姿勢を正して言う俺にキョトンとするその場の面々。

小夜だけは構わず食事中だけど。っていうか食いすぎだろう。

「俺に魔法とか色々と教えて欲しいんです。将来的には管理局で働きたいと思っています。ですからお願いします！」

そういつて、リーゼ姉妹のほうへ頭を下げる。

俺の言葉を受けて、2人は相談を始めているのだろう。

だろうというのは、表面上は『もつと詳しく理由を』などの質問を俺にできてくるからだ。ただ、不自然な程2人は相談する素振りを見せない。それは念話で会話をしているせいだろう。この様子ならば、クロノもその会話に参加しているはず。そしてクロノはめっちゃくちゃいいやつ！だからきつと大丈夫。

「いいんじゃない、アリア？クロスケの競争相手にでもしておけばいいんじゃないかな。」

「そうだね。私達の教え方は優しくないけどいい？」

ほらねっ！！

「はいっ！というかむしろそっちの方がいいですっ！！」

『は？』

おっと、思わず本音がポロリ。

なににせよ、これで師匠の確保は大丈夫だな。

…小夜を信用していないわけじゃないんだよ？本当だよ？

………つして俺の修行の日々が始まった。

ハラオウン家にて。
(後書き)

筆が進まない…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2397m/>

Mでリリなの。

2011年1月3日23時01分発行